



と www.tenpla.net

プラネタリウム

vol.
226

高梨直紘 (東京大学) / ☆ 平松正顕 (国立天文台)

今回は昔話を少し。およそ20年前、大学院に入りたてだった筆者(平松)は、ある活動に参加していました。駅前や繁華街で突如望遠鏡を展開し、道行く人に星を見てもらうというもの。私より少し先輩の大学院生たちが立ち上げたこのグループは「ゲリラ天体観測 天の川急便」を自称し、特に誰に頼まれるでもなく星を届けていました。「晴れてるし、今日行っとく?」という軽いノリで出かけることもあれば、バレンタインなど世の中がすこしウキウキしているときをめぐらして、あるいは七夕や十五夜など夜空に意識が向きやすいときを狙って出撃することもありました。サイコロを転がして出た目の数だけ山手線の駅を進み、20人に星を見せたらまたサイコロを振って、というアソビもしていました。

家路を急ぐ人、グループで楽しく食事した後の人など、出会う人たちのシチュエーションはさまざま。そんなところで、若い男女の団が望遠鏡を空に向けている。怪しい、と思って通り過ぎた方のほうが多かったでしょう。それでも中には恐る恐る近づいてきてくださる方もいらっしゃいました。2~3人が望遠鏡を覗き始めれば、もうこちらのペース。望遠鏡を覗いて会話している姿や順番を待つ列が見えたら、好奇心が勝って足を止めてくれる方も増えます。「望遠鏡を覗いたのは小学生以来」とか「土星を見るの初めて!かわいい!」とか、鮮烈な反応にはこちらも驚かされます。その歓声がまた人を呼び、列は伸びていきます。

天の川急便の隊員は、ほとんどが国立天文台定例観望会の学生スタッフでした。観望会にいらっしゃるお客さんが望遠鏡を覗いた時も、大変良い反響があります。でも、国立天文台に来られる方は社会の中ではごくわずか。「星を見に出かけよう」という思いがなければ参加することはないでしょう、そもそも国立天文台の存在を知らない方、ふだんの意識に夜空が含まれない方も多いはず。それはもちろん無理もないこと。世界は広く多様で、みんな忙しく暮らしているからです。私たちは星を趣味や仕事にしているからそこに意識が向くのであって、私たちに見えていない世界はたくさんあるに違いありません。

そんな中で、星空との予想外の出会いを演出するのが天の川急便の活動でした。とはいえ、「星空はいいものですよ!」と押し売りをするつもりもありません。「もしお口に合えば、どうぞ」程度でしょうか。無理やり手渡すのではなく、欲しいと思ったら手が届くところに置いておく。このアプローチは、このコラムの出発点でもあった天文学普及プロジェクト「天プラ」とも共通します。天プラでは、六本木ヒルズ森タワー屋上など人が集まる場所で今も天体観望会を続けています。天の川急便のように神出鬼没というわけではなく年間予定まで決まっているカッコリした形態ですが、観光地に夜景を見に来て星空に出会う、というのたいへん喜んでくれます。

星に触れる、夜空に触れる、広い世界に触れる。駅前や繁華街で道行く人に星を見てもらう活動をしていた、あるグループの思い出話です。

若気の至りで「ゲリラ天体観測」と名づけた天の川急便の活動は、隊員が社会人となって背負う責任が大きくなったところに停止しました。もちろん開催日を予定し各所に許可を取ってゲリラを名乗らず活動することは可能で、各地には街角観望会を開催している団体がいくつもあるようです。天の川急便のずっと前から活動しているところもあります。

天の川急便の活動では、こちらも普段の生活では話をしない方たちに出会うことができました。駅前で展開しているとバスの運転手さんがいらっしやったり、観光地では隣のホテルの総支配人の方がいらっしやったり、ここでは書けないような方が名刺を持っていらっしやったり。温かい飲み物や食べ物を差し入れてくれる方も複数。星空という新しい世界を届けようと思って活動していたら、こちらも新しい世界に触れることができた。こうやって少しずつひとりひとりの世界が広がっていくのも、いいなと思うのです。



明るい銀座やお台場で活動中の天の川急便と、望遠鏡を覗くための人の列。